

昭和萬葉集

卷七

昭和二十年～二十二年

講談社

昭和萬葉集 卷七

定価 下六〇〇円

昭和五十四年四月十八日 第一刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五一一二(大代表)

振替 東京八一三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

用紙 本州製紙株式会社

王子製紙株式会社

製函 株式会社岡山紙器所

©講談社 一九七九年 Printed in Japan

0392-441072-2253(0) (昭萬)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

昭和萬葉集 卷七／目次

口絵
凡例

I

戦争終結

玉音放送

12

八月十五日

16

国破れたり

18

明るい夜

22

皇軍解体

皇軍解体

29

軍旗奉焼

32

武装解除

32

還りゆく兵

34

敗戦前夜

敗戦前夜

23

広島

24

長崎

28

最後の御前会議

28

崩壊の日

満州・樺太にて

35

台湾にて

37

朝鮮にて

37

II

無言の帰還

夫・恋人を偲ぶ

40

子を憶う

42

兄・弟の死

45

友の死

46

還りを待つ

夫を待つ

49

父・母の思い

51

兄・弟を待つ

53

英霊還る

47

俘虜郵便 54
未復員兵 55

はるかなる祖国

収容所にて 56

中国にて 58

ラバウルにて 59

チモール島にて 59

従軍看護婦 59

苦役に耐えて 60

望郷 61

復員を待つ 62

戦犯 63

オーロラの下に

虜囚の旅 65

収容所の夜 66

兵還る

復員船上 86

復員 89

祖国の山河 89

復員列車 90

重労働 67

飢えと渴きと 68

異郷に死す 69

望郷賦 70

シベリアの風光 71

ダモイ 72

流亡の旅

難民生活 73

満州から 74

引揚行 75

暴民の襲撃 76

三十八度線突破 77

無蓋車の旅 78

引揚船 80

祖国に 81

引揚者 83

還ってきた兵 91

夫を迎える 93

わが子を迎える 94

兄・弟を迎える 96

友を迎える 96

復員兵の思い 97

復員兵の悲しみ
復員兵を見る

100
99

廃墟の中から

焦土

100

焼跡に生きる
焦土の自然
焦土を歩く
残骸のある光景

110 108
104
111

IV

飢餓との戦い

空腹に耐えて

114

雑炊と粥

一粒の米

白米の飯

いも

代用食

肉と魚

ささやかな奢り

酒

塩

野草

家庭菜園

食糧配給

闇

たけのこ生活

買出し

135
134

貧しい生活

住宅難

停電

衣料不足

インフレ

旧円封鎖

新円

失業者

重税

煙草

戦後の風俗

闇市

地下道にて

浮浪児たち

夜の女

荒廃

若い世代

153
152
150 149
154

140
138

142 142 141

145 145
144

娯楽

154

満員の車内で

155

木炭自動車

156

復員便り

157

尋ね人

157

ニュース

158

進駐軍

マツカーサー

158

進駐軍

158

進駐軍の周辺

161

複雑な感情

163

生活の周辺

戦後の感懐

164

生活の周辺

168

疎開生活

171

別居生活

172

平和のよろこび

172

いまわしい記憶

戦場の記憶

173

戦中の生活

174

原爆の後遺症

174

自由への期待

新生日本

178

解放の日

178

変革の予感

180

思想の自由

182

懐疑

183

青春

184

民主政治のスタート

人間天皇

186

学校で

墨塗り教科書

197

新憲法成る

189

婦人参政権

191

戦犯たち

193

公職追放

193

民主化の波

194

労働運動

195

二・一スト

197

民衆を思う

197

VI

愛と死

父・母	222
父・母の死	222
父・母を偲ぶ	223
亡き妻	224
夫と妻	226
夫を歌う	229
みどり児	230
幼な児	231
吾子	234

愛の歌

子を悼む	236
兄弟・家族	237
友	239
わが師	240
愛の歌	242
病み臥して	246
病床の日日	250
血を吐く	250

農地改革と農村

教室にて	198
教師の歌	199
子供たち	200
学童の歌	201
農地改革	202
農に生きる	203
農家も貧し	204
開墾	205
供出	207
米作り	208

仕事の歌

農作業	209
家畜	211
農家の一日	212
工場	213
仕事の歌	214
商いの歌	216
闇屋	218
漁村で	219
医師	220

食餌
手術

251 250

ハンセン氏病者

252

四季の移ろい

春 254

芽ぶく 257

霞 257

春の花 258

夏 259

夏の花 261

虫たち 263

秋 264

時雨 265

秋の虫 266

秋の草花 267

落葉 268

冬来る 269

冬の鳥 273

歳暮・新年 274

くさぐさの歌

落日 275

夕映 275

折々の歌

疎開詠吟 284

省りみて 288

日日随感 288

山河あり 290

老 291

神・仏 292

第二芸術論 293

学芸に生きる 294

折々の歌 295

星 276

月 277

風・霧・雲 277

山・海 278

ふるさと 279

鳥 280

都会風景 281

汽車・鉄道 282

南海大地震 283

深い虚脱状況から〈昭和短歌史概論〉

彷徨の日々〈昭和史私論〉——山田宗睦

年表

作者略歴・索引

■脚注目次

〈戦争終結〉

玉音放送

終戦の詔書

近衛師団の反乱

八月十五日

ポツダム宣言

敗戦時の釈道空

一億総懺悔

進駐軍上陸

降伏調印式

日本管理方式

燈火管制の廃止

〈敗戦前夜〉

敗戦前夜

正田篠枝

広島原爆

ヤルタ会談

長崎原爆

最後の御前会議

国体護持

〈皇軍解体〉

皇軍解体

軍人の不従従・自決

軍旗奉焼

武装解除

停戦命令・勅語の下賜

国内将兵の復員

〈崩壊の日〉

満州の日本人

ソ連の参戦

海外の日本人

引揚

〈無言の帰還〉

戦死者

戦争未亡人

終戦後の戦死

〈還りを待つ〉

未復員兵

ソ満国境

俘虜郵便

〈はるかなる祖国〉

収容所

傷病兵

労役

復員を待つ

戦犯

山下奉文

〈オーロラの下に〉

シベリアへ

ラーゲリ

重労働

異郷に死す

シベリアの風光

ダモイ

〈流亡の旅〉

難民

集中營

暴民の襲撃

三十八度線

無蓋車の旅

葫蘆島

引揚船

LST

引揚業務

〈兵還る〉

国外からの復員

軍政下の沖縄

外食券

復員列車

ポツダム進級

軍人恩給の廃止

遣家族援護

ソロモン海戦

〈廃墟の中から〉

戦災の被害

焼跡の生活

住宅難	139	進駐軍と日本人	160	民主化の波	194
《貧しい生活》	137	対日連合理事会	160	公職追放	193
臨検	135	進駐軍	158	戦争犯罪者	192
買出し	134	マッカーサー	158	東条の自殺未遂	193
たけのこ生活	133	《進駐軍》	157	公職追放	193
閨	132	復員便り	155	婦人参政権	190
代用醬油	132	接吻映画	154	新憲法の制定	189
配給米	131	若い世代	153	人間天皇	186
食糧配給	130	特攻くずれ	153	《民主政治のスタート》	184
家庭菜園	130	荒唐	152	占領軍神話	182
野草	129	夜の女	151	五大改革指令	180
塩	127	『薔薇祭』	150	志賀義雄	179
酒	126	浮浪児	147	渡辺順三	178
サツカリン	125	《戦後の風俗》	146	政治犯の釈放	178
肉と魚	123	闇市	145	小名木綱夫	175
蒸しパン	122	たばこ	145	解放感	178
アメリカの粉	121	重税	144	《自由への期待》	175
代用食	120	徴用解除	143	『ノモア・ヒロシマ』	175
乾燥いも	119	失業者	142	『人生論ノート』	172
銀シャリ	118	新円	141	《いまわしい記憶》	166
「人民短歌」	117	第一封鎖	140	対戦車肉薄攻撃	163
雑炊と粥	116	旧円封鎖	140	転入抑制	163
乏しい食事	115	インフレーション	140	戦争画	163
食糧不足	114	配給物品	140	《生活の周辺》	162
隠匿蔵物資摘発	113	衣料不足	140	連合軍専用列車	162
餓死者	112	停電	140	基地の周辺	162
《飢餓との戦い》	111			労働運動	195
				二・一スト	196
				《学校で》	197
				墨ぬり教科書	198
				『くへのあゆみ』	199
				六・三制	200
				教師の資格審査	200
				手紙検閲	201
				右側通行	201
				子供たち	201
				《農地改革と農村》	202
				農地改革	205
				貧しい農民	206
				開墾	208
				供出	213
				《仕事の歌》	216
				工場の戦災被害	218
				財閥解体	219
				ピース	218
				閨屋	218
				漁民の生活	219
				《折々の歌》	286
				土屋文明の戦後	293
				第二芸術論	293
				「新しき短歌」	298
				太田村の高村光太郎	299
				茂吉と終戦	299

◆凡例

1 本全集は、昭和元年から五十年までの間に
つくられた短歌を対象として、一般投稿
歌、依頼出詠歌、各種資料からの発掘歌
等々を、選者の選をへて編纂した。

2 収録作品は、作歌年（作者本人の申告もし
くは初出掲載誌発刊年等）によって分類
し、年代順に巻分けを行なった。

3 各巻内は、作品のテーマ、素材により分
類・配列した。また分類ごとに初出作品の
上段に、色刷で編集小見出をつけた。

4 作者名の下に、生（没）年、出典、小題等
を必要に応じてつけた。

・収録作者全員の作者略歴・索引を巻末に
つけた。

・生年または現存（没年）が未詳の場合は
…で示した。

〔例〕大8…〈生年のみ判明〉

…昭20〈没年のみ判明〉

・出典は、原則として編集部が典拠とした
ものを示した。『』は歌集、『』は新
聞・雑誌などを、また（ ）内の数字は、
刊行年、刊行年月（日）号を示す。

〔例〕『形相』（23）〈昭和二十三年刊〉

『アララギ』（17・2）〈雑誌「アラ
ラギ」昭和十七年二月号〉

『朝日新聞』（17・12・8）〈昭和十
七年十二月八日号〉

・二首以上の収録作品で、出典が複数とな
っている場合の表示。

〔例〕『アララギ』（17・9、10）〈九月号
と十月号〉

『アララギ』（17・9）…三首（18
・3）…二首…十七年九月号から三

首、十八年三月号から三首

・必要に応じて、出典の下に原典につけら
れた小題を付した。

〔例〕『露原』（22）…「食生活」…歌集『露
原』にある「食生活」という小題の
ついた一連からの抄出

・必要に応じて、作歌時の所在地、未発表
作の典拠等をへ…内に記した。

〔例〕「北幸にて」…『日記より』

5 作品の表記は、よみがな（ルビ）をふくめ
て、旧かな使いを原則とした。よみがなは
編集部判断で、必要に応じて加減した。

漢字は新字体使用を原則とした。
6 作品の下段に色刷で脚注欄を置いた。

・昭和史事項、短歌史事項の解説脚注は、
太字（ゴチック体）で見出をつけた。なお
（ ）内は執筆者名。

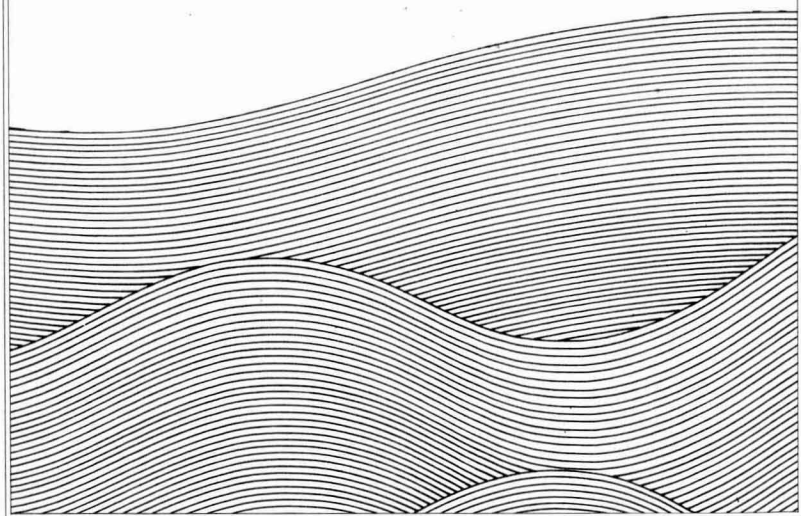
・作品中の難解語、特殊用語、古語、誤解
を生じやすい語などに語注をつけた。

・収録作品につけられていた詞書は、必要
に応じて「詞書」と頭につけて脚注欄に引
用記載した。

・検索しやすいように、作品の末尾と該当
する脚注の頭に、*または**をくりかえ
し付して、対応させた。

■ 本巻収録の作品の作者・著作権者で、所在
不明等のため、連絡のとれない方がありま
す。巻末作者略歴・索引の*印を付した作
者がこれに該当しますが、お心あたりの方
は、編集部まで御一報くださいますようお
願いたします。

I



戦争終結

斎藤茂吉 明15／昭28 『朝日新聞』(20・8・20)

玉音放送

聖断はくだりたまひてかしこくも畏くもあるか涙しながる*

万世ノタメニ太平ヲヒラカムと宣^のらせたまふ天皇陛下が大君

釈 迢空 明20／昭28 『倭をぐな』(30) 昭和廿年八月十五日、正坐して

大君の宣^のりたまふべき詔旨かは。然るみことを われ聴かむとす**

戦ひに果てしわが子も 聴けよかし。かなしき詔旨 くだし賜^たぶなり*

大君の 民にむかひて あはれよと宣^のらす詔旨に 涕^{なみだ}嚙^かみたり

鎌方徳蔵 明19／昭45 『流水抄』(43)

み民われに死ねと詔^のらすと思ひてぞラジオの前にかしこまりける

香取秀真 明7／昭29 『香取秀真全集』(31)

しろしめすおほみたからをあはれみていくさやめむのみことのりくだる***

*** しろしめす〓統治される。

おほみたから〓天皇が治めている人民。

玉音放送 ポツダム宣言受諾のむねを国民に告げる詔書は、天皇み

ずから読み、ラジオによってこれを国民に周知させるという方式をとった。「必要があればマイクの前に立つ」という天皇の意志によるものであった。十四日夜、宮

中で録音が行なわれた。その夜、近衛第一師団の反乱があったが、録音盤は侍従職に保管されて、翌

朝内幸町の放送会館に運ばれた。反乱将校は早朝放送会館に入り、放送を妨害し、抗戦を呼びかける放送を強要したが成功せず引きあ

げた。正午、詔書の放送が行なわれた。この放送は前日から「重大放送」として予告され、昼間送電停止の地域にも臨時に送電されて、徹底がはかられた。(原田勝正)

* 聖断〓天皇陛下の決定。

** 宣^のりたまふべき〓おつしやらねばならぬような。

詔旨かは〓お言葉であろうか。

然るみこと〓そのようなお言葉。

* 聴けよかし〓きつと聴きなさいよ。

*** しろしめす〓統治される。

おほみたから〓天皇が治めている人民。

小旗源三 明38／昭40 『国民文学』(21・4)

国民に陛下みづから喚びたまふラジオの前に頭垂れけり

井上健太郎 明34昭和46 『国民文学』(21・4)

雑音のまじるラジオに大御声聞きすましめて刻々苦し*

藤田菊次 明26 『国民文学』(21・4)

軒下にひそかに人の佇みてわが家のラジオ聞くらむ気配す

内堀青扉 『国民文学』(21・5)

みことのり承り^{うけたまは}をる我の眼にあたりの大^ご地暗むが如し

臼井大翼 明18昭和22 『短歌研究』(20・11)

唾も息も嚙みてつ^つつしむ今のうつつ大^{おほみことのり}宣言つらぬきたまふ**

山下秀之助 明30昭和49 『短歌研究』(20・10)

我大君五内は裂くと宣^{のたま}へばこの身一つの置きどころなし*

潟岡路人 明37 『短歌人』(21・4)

残されし命に沁^しみて額^{ぬか}伏しぬラヂオ切れ切れに告ぐる御^{おんこゑ}声**

西田アイ子 大13

*大御声 天皇陛下のお声。
刻々 瞬間瞬間。

**うつつ 現実。

*五内は裂く 胸もはりさける、の意。五内は五臓(心臓、肝臓、肺臓、腎臓、脾臓)のこと。

*額伏しぬ ひといたを地につけて伏し拝んだ。

大君の御詔の前に泣き伏して至らざりしを悔い詫びまつる*

鹿兒島寿藏 明31『『求青』(25)

炎天の焦土に声なし一切のことやみたりとわれこゑをのむ

こゑふるひ宣らしし今の放送にわれのいのちのつづくをただ知る*

国やぶれ歌滅びなむといふこゑに我は答へきただ否とのみ

内藤清子 『潮音』(20・9・10合併号)

戦は悲しきをはり告げにけり玉音時にくもらせたまふ*

堀口大學 明25『『堀口大學全歌集』(51)

泣かでやは三千載の聖天子仇しえみしに和を乞ひ給ふ**

佐藤佐太郎 明42『『立房』(24)——晩夏光

かすかなる民の一人とつつしみて御声のまへに涙しながら

こゑひびく勅のまにまうつしみの四肢ことごとく淨からんとす*

あかあかと燃ゆる火中にさくといふ優鉢羅華をぞ一たび思ふ**

なでしこの透きとほりたる紅が日の照る庭にみえて悲しも

*至らざりしを〓行きとどかなかつたことを。

**こゑふるひ〓声を震わせて。

終戦の詔書 この詔書はボツダム宣言受諾が決定された八月十日の夜から内閣で起草に入り、文案を川田瑞穂、安岡正篤が校閲、推敲し、十四日の閣議にかけた。閣議では数カ所の修正が行なわれ、とくに「戦勢日ニ非ナリ」を「戦局必スシモ好転セス」と修正したところは、貼紙がしてあり、正文完成後の修正ともみられる。他にも、正文に書きこみをした箇所がある。玉音放送のさい「五内為二裂ク」堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍ビ」といった文言によつて、戦争終結を知った人も多かった。なお東郷茂徳外相は不慮の事態を考え、安藤義良外務省政務局長に詔書を別に起草させていた(原田)

*悲しきをはり〓悲しい終結。

**泣かでやは〓泣かないでいられようか。

三千載の聖天子〓三千年統いている尊い天子様、つまり現天皇。仇しえみし〓敵である異国人。

*勅のまにま〓お言葉を聞くにしたがつて。

**優鉢羅華〓睡蓮。